

ヨハネによる福音書 18 章 1-11 節

The Final "I Am." Statement.

最後の断言「I Am～私はある」

18:1 イエスはこれらのことを話し終えられると、弟子たちとともに、ケデロンの川筋の向こう側に出て行かれた。そこに園があって、イエスは弟子たちといっしょに、そこに入られた。**18:2** ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。

18:3 そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。**18:4** イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、「だれを捜すのか」と彼らに言われた。

18:5 彼らは、「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。**18:6** イエスが彼らに、「それはわたしです」と言われたとき、彼らはあどずさりし、そして地に倒れた。

18:7 そこで、イエスがもう一度、「だれを捜すのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。**18:8** イエスは答えられた。「それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。」

18:9 それは、「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」とイエスが言われたことばが実現するためであった。**18:10** シモン・ペテロは、剣を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。

18:11 そこで、イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」

ヨハネの福音書で、イエス様が自分自身に対して出エジプト記 **3:14** の神の名前を使って断言していることについて **10** 回に分けて見てきました。イエス様は、**7** 回は具体的な役目として表現して断言しましたが、それ以外でも神様の名前を使って **2** 回断言しました。今日は最後の断言に焦点を合わせますが、先ずその **2** つの箇所を見て下さい。

ヨハネ **8:58** 「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」

自分が永遠の生ける神の子だと断言しています。

ヨハネ **18:5** 「彼らは、「ナザレ人イエスを。」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです。」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。」

ヨハネの福音書でイエス様は合計**9**回、神様の名前をこのように使って断言しました。今日は最後の**9**番目の断言に焦点を合わせて一緒に見てみましょう。

1. イエス様の命は取られたのではなく捧げられた。

イエス様の許可無しに誰も危害を加えることができませんでした。

ヨハネ **18:6** 「イエスが彼らに、「それはわたしです。」と言われたとき、彼らはあどずさりし、そして地に倒れた。」

これを表面的に読む時、大袈裟に書かれたのではないかと思うかも知れませんが、イエス様は生ける神の言葉ですから、一言だけでも全能の力を働かせる方だと考えたら、これが書いてある通りに実際に起きたのは当然の事です。

ヨハネ1:14「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」イエスは万物の創造主で、その御言葉によって全てを造られたたと聖書に書いてあります。つまり、イエス様の言葉にどれぐらいの力があるかを知っていたら、これは決して大袈裟に書かれていないことが分かります。今日の箇所からも、イエス様の敵でさえ認めざるを得なかった事がわかります。ヨハネ7:46「役人たちは答えた。「あの人が話すように話した人は、いまだかつてありません。」イエス様は奇跡を求められた時に「私の時はまだ来ていません。」と繰り返して言いました。ヨハネの福音書2章で、結婚式で最初の奇跡を行う前にお母さんのマリヤにも言まし、ヨハネの福音書7章でも兄弟達に言った文脈でその意味が分かります。兄弟達は首都エルサレムでもっと公に奇跡を見せるように言っていました。イエス様は最初から、それが自分の処刑を引き起こす事になるのを知っておられたので、「私の時はまだ来ていない。」と答えました。つまり、自分の最大の使命を果たす時がまだ来ていないと言う事です。十字架で、自分から命を捧げる事がイエス様の最大の使命でした。私は良い羊飼いであり、羊の為に命を捨てる、とおっしゃった時にも言われています。

ヨハネ10:18「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」

ですから、ゲッセマネの庭で逮捕される時にも、ご自分で自分の言った言葉を証明して、そして実現しました。一般世間でイエス様の十字架の処刑は小さい出来事ですが、聖書と神様の計画の中では人類のすべての歴史の中心であり、全ての帝国の歴史を合わせても、イエス様の十字架の大切さとは比べ物になりません。イエス様は人類の救い主として神様の定められた時になるまで、しかも、イエス様が許可しない限り、誰もイエス様に対して何もすることが出来ませんでした。

イエス様は、イスラエルの国でローマ帝国の全ての権威を持っていた総督ピラトに尋問をされる時に素晴らしい証をしました。

ヨハネ19：10-11「そこで、ピラトはイエスに言った。「あなたは私に話さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。」19:11 イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」

イエス様ではなくてピラトの方が怖がっていたことがその話の流れで書いてあります。

2. イエス様の守りは全能の力である

ヨハネ18:7-9「そこで、イエスがもう一度、「だれを捜すのか。」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを。」と言った。18:8 イエスは答えられた。「それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。

18:9それは、「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした。」とイエスが言われたことばが実現するためであった。」

イエス様はご自分が処刑される為に連れて行かれるのが分かった上で、4節で「イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、「だれを捜すのか」と彼らに言われた。」のです。自分の事ではなくて自分の弟子達の事を考えて彼らを守る事を優先しました。これは凄い事で、普通なら誰でも、処刑される前に他の人を守る気持ちの余裕はありません。

それだけではなくて、武装して来た兵士達と役員達とを一言だけで倒しました。別の箇所でもレギオンと言う悪霊どもを一言だけで追い出した力を持っているイエス様は当然、一言だけで人間を倒すことが出来ます。でも、私達にとって一番素晴らしいのは、その理由が自分の力を見せびらかす為ではなくて、自分の弟信者達を守る為だったということです。しかも、それは神様の御心と御言葉を実現する為でした。これを正しく理解するのがとても大切な事です。なぜなら、父なる神様と御子イエス様は性質において全く同じですから、イエス様も父なる神様も全く同じように守って下さ

るからです。以前、14章で一緒に見ましたが、「私を見た者は父を見たのです。」とイエス様はピリポと言う弟子に言いました。以前一緒に見た別の箇所にも書いてあります。

ヨハネ10:29「わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。10:30 わたしと父とは一つです。」

イエス様の守りと父なる神様の守りは全く同じです。手前の28節でも、「誰も私の手から奪うことが出来ない」と言われています。

神様は酷くて厳しくて冷たいけど、イエス様は優しいから、イエス様の方が好きで神様は好きではないと思ったら、間違いです。もっと大きな間違いは、それがイエス様の名前で祈る理由であると思うことです。それは大間違いです。イエス様の役目は、唯一、罪のない人間になって人類の罪を取り除く救い主として、また唯一、神と人間の間の仲介者になって下さることです。更にもっと大きな間違いは、イエス様でも厳しい時があるから、マリヤやペテロなどの聖人を通して祈る事です。それは完全な偶像礼拝と言う罪です。天使達でも、聖書で自分達の前でひれ伏して祈ろうとした人々に、「それはいけません」と言って、そうしてしまう前に止めさせました。その祈りは偶像礼拝と言う罪なので天使達も使徒達も、絶対にしてはいけませんと言って人々にそれを止めさせました。

ヨハネ18:9に戻ってみると、聖書のどこの言葉を実現する為にイエス様はこれを言ったかを考えさせられます。

ヨハネ18:9「それは、『あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした。』とイエスが言われたことばが実現するためであった。」

イエス様自身が生きている神様の御言葉です。

マタイ24:35「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」

イエス様が唯一、このようなことが言える方です。どこでこの言葉を言われたのでしょうか？

ヨハネ17:12「わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためです。」

これはイエス様の守りについて書いてありますが、その前にイエス様はなぜ、守って下さるかを話されました。つまりそれは父なる神様の御心だと強調されたのです。両方の守りです。

ヨハネ6:39-40「わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。

6:40 事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」

更に、イエス様がこの御言葉をどのような話の流れで言われたかを見て下さい。

ヨハネ6:37「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに來ます。そしてわたしのところに來る者を、わたしは決して捨てません。」

これは何があっても、イエス様も、父なる神様も、私達を絶対に切り捨てる事はないという強い確信を与える約束です。最後の最後まで、無事に天国に着くまで全ての信者を一人一人守って下さいます。イエス様の守りがあれば、他には何も要りません。

3. イエス様は自分の教えを実行した。

ヨハネ18:10-11. シモン・ペテロは、劍を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。18:11 そこで、イエスはペテロに言われた。「劍をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」

ヨハネがこの出来事を記録した時、イエス様が最後まで父なる神様の御心に従って十字架の死にのぞんだ事に焦点を合わせて書きました。ゲッセマネの庭で起きた事を細かく記録しなかったのです。イエス様のゲッセマネの庭で体験した苦しみも書いていませんし、そこでイエス様が行った奇跡も書いていません。最初から、ヨハネは7つの奇跡だけを選んで記録し、その目的もはっきり書きました。

ヨハネ20:30 「この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前でなされた。20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」

ルカは医者でしたので福音書を書く時に違う角度から見て書きました。たとえば、イエス様がゲッセマネの庭で血が交えた汗をかくほど大変な苦しみを経験した事を記録しています。

ルカ22:44 「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」

これは今、実際に医学的に解明されている現象です。大変なストレスが原因の一つと言われてます。ルカは医者として、それとは別にもう一つどうしても記録したい出来事を含めて記録しました。

22:49 「イエスの回りにいた者たちは、事の成り行きを見て、「主よ。剣で打ちましょうか。」と言った。22:50 そしてそのうちのある者が、大祭司のしもべに撃ってかかり、その右の耳を切り落とした。22:51 するとイエスは、「やめなさい。それまで。」と言われた。そして、耳にさわって彼を直してやられた。」

これはすごい事でそこでイエス様は奇跡的に敵対していた人の一人を癒したのです。ヨハネは耳を切られた人の名前を記録していて、それはマルコスと言う大祭司のしもべの一人でした。イエス様を逮捕しに来た人です。その前の11章でラザロを死者からよみがえらせた奇跡の方が大きいので、それと比べてこの奇跡は小さいですが、何が凄いかと言いますと、耳を切られた人を癒した奇跡だけではなくて、イエス様は自分自身が血の交えた汗をかくほど苦しい中でも、処刑される為に連れて行かれるのも全部知った上で、その最中に敵を愛しなさいと言う自分の教えを実行したことです。もちろん、イエス様は更に、十字架でそれを明確に証明しました。そして次の地上最大の力ある祈りを捧げました。

ルカ23:34 「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。』彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」 イエス様はゲッセマネの庭で癒されたマルコスをも、十字架に自分を釘付けた人々をも、全く悔い改めていないままで彼らを赦しました。和解が成立したかどうか分かりませんが、それは相手がその赦しを受け入れるかどうかの別の問題です。赦す側としてイエス様は赦す条件を付けていませんでした。私達に対しても全く同じです。

ローマ5:8 「5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」 無償の愛は無条件的に赦します。

ヨハネ13:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

まとめ

先週に、敵を愛しなさいと言うイエス様の戒めを実行した3人について書かれている本をお勧めしました。「手負いの虎」と言う本で、特に男性の為にお勧めしましたが、今日はもう一冊の本、女性の為にもなる本をお勧めしたいと思います。神様の全ての祝福を経験する秘訣について書かれています。

ピーター・ホロビン著「地上で最も力ある祈り—あなたの人生に変革をもたらす祈り」

